

『サングラーフ』における幽霊語について

菅原 睦

I 古典チャガタイ語辞書としての『サングラーフ』

18世紀にアフシャール朝宮廷に仕えた Muḥammad Mahdī Xān によって編集された『サングラーフ』は、チャガタイ語の大規模な辞書として現在でもその価値を失っていない。またチャガタイ語・チャガタイ文学がどのように広まり受容されていたかという観点からも興味深い情報を提供するものである。とは言え、地域的に見ても時代的に見ても本来のチャガタイ語（古典チャガタイ語）とは一定の隔たりのある環境で編まれたものであるだけに、その内容のすべてを無条件に受け入れることはできない。例えば動詞 *almaštūr-* の項 (48v21)¹⁾ には次のような説明が見られる。

「足を動かす (*pā rā ḥarakat dādan*)。単独では意味を表わさず²⁾、『足』という語を必要とする。」

そして用例として、ナヴァーイーの次の謎詩 (*luḡaz*) をあげている。

birār ayagları ham bar u ṭurfaraq bu kim/ayag uçıda birār köz ham ettilār iḡhār qačan ayagların almaštururlar ol sā'at/qanat urarğa bolurlar ṭuyūr dek ṭayyār
「二つの足がありながらも不思議なことに / 足の端にはひとつずつの眼を光らす
両足を動かすとその時 / 鳥のように翼をはためかせるのである。」 [=BW : 510]³⁾

実は *almaštūr-* は、ウズベク語 *almaštir-*、ウイグル語 *almaštūr-* などと同じく「取り替える」という意味の動詞である。上記例においても *ayagların almaštūr-* で「足を入れ替える」という意味で用いられているのであり、上の説明のように「足」という語と合わさって「足を動かす」を意味するものではない。このことから、編者がこの語の正確な意味を知らなかったことに加えて、そのような場合に用例に合うような語義をいわばつくり出して

1) 以下『サングラーフ』からの引用は Sang. 所収のファクシミリ (注9参照) により、葉数・行数を示す。

2) 'be tanhāi efāde-ye ma'ni na-mikonad'。このような場合に他の項目では 'efāde-ye in ma'ni na-mikonad' 「この意味を表わさず」とあるのが普通であり、ここでもそのように訂正するべきかも知れない。

3) ちなみに、この謎詩の答は「鉄」である。

記していたことがうかがえる。

一方で編者のチャガタイ語知識の性格を考える上で興味深い例として、接尾辞-jä/-ja; -čä/-čaの項に見られる次の語例を指摘することができる。

nejä(203v9)「どのように、どんな」(čegune)

nečä(203v10)「いくつ、いかほど」(čand tā va har čand)⁴⁾

通常想定されているチャガタイ語の音韻体系では、固有語に音素 /j/ は現われず⁵⁾、このようなjとčの対立は起こり得ない。一方これと並行する現象はアゼルバイジャン語に見られる: nejä「どのように、どんな」、nečä「いくつ」⁶⁾。

『サングラーフ』の編者 Muḥammad Mahdī Xān がイランで活動した人物であった⁷⁾ことを考慮するならば、古典チャガタイ語に nejä: nečä の区別が実際にあったと推定するよりも、編者にとってより身近であったイラン方面のチュルク語の特徴がここに反映されていると見る方がより自然である。この推定は、上で見た動詞 almaštūr- が、ウズベク語やウイグル語以外にもカザフ語 almas̄tīr-, キルギス語 almaštīr- のように今日の中央アジアのチュルク諸語で広く見られるのに対して、アゼルバイジャン語やトルコ語では知られていないこととも矛盾しない。即ち、Clouston の推定⁸⁾とは反対に、編者 Muḥammad Mahdī Xān は現在のアゼルバイジャン語やトルコ語につながる西アジア方面のチュルク語には通じていたものの、当時の中央アジア・チュルク諸語については必ずしも十分な知識をもっていなかったのではないかと疑われるのである。いずれにせよ、『サングラーフ』は本来のチャガタイ語とは異なる言語的な環境で編まれたものであり、そのことに起因する一定の制約があることに十分な注意を払う必要がある。

以上の観察を踏まえ、本稿では『サングラーフ』における見出し語項目の選択と、与えられた語釈について論じたい。具体的には、2章、3章において『サングラーフ』に古典チャガタイ語の語彙以外のものが混入している可能性を示し、4章においては『サングラーフ』の語釈が誤りである、ないしは疑わしい例をいくつか取り上げる。

なお本稿で扱う例は『サングラーフ』の収録語彙のうち alif の部から sīn の部までに含ま

4) 'bā jīm-e 'ajami' 「ペルシア語の jīm で」という注記により、第2音節の子音がjではなくčであることが示されている。なおNの部 nejäの項(322v15)には「どれほど、いかほど」(če qadr va har čand)、同じく nečäの項(322v16)には「いくつ」(čand tā)とあり、編者の側に混乱があったことがうかがえる。

5) 例えば Eckmann 1966: 42 を参照。

6) アゼルバイジャン語の音韻体系から判断するならば、nečä「いくつ」は他のチュルク語からの借用である可能性が高い。

7) 『サングラーフ』の編者 Muḥammad Mahdī Xān については Sang, T: 3-7 に詳しい。

8) 'we can probably conclude that the dialect with which our author was most familiar was Özbek, that he had some knowledge of Anatolian and of the minor differences between that and Azeri...' [Sang.: 15].

れるもので、これは全体の半分強に当たる⁹⁾。

II オグズ形式の混入

おそらくはより網羅的な辞書を目指したため、『サングラーフ』に収録された語彙の範囲はかなり広いものとなっている。その際の語彙の選択がどのようになされているかは興味深い問題である。明らかに編者の選択にはある種の偏りが認められる。例えば見出し語としてあげられている人名には、中央アジアに関係するものよりも、むしろイル・ハン国やセルジュク朝に関する人物の名前がしばしば目につく¹⁰⁾。

Abāga (27v8), Öljäytü (86r10), Tolī (184v24); Aq Sonqur (45v1), Saljuq (233v29), Sanjar (235v17) *etc.*

このような、チャガタイ語の辞書にはそぐわない、チャガタイ語の範囲からの「逸脱」と言うべき例は、上記のような百科事典的な項目ばかりではなく通常の語彙として収められたものの中にも見られる。例えば「ウズベク」(uzbakiye), また「ルームのトルコ語」(torki-e rumi; 以下「ルーミー」と略記) という注記をもつ項目があるが、これらにはそれぞれチュルク語キプチャク語群、オグズ語群の言語的特徴が認められる¹¹⁾。

「ウズベク」の例

taw(165v3) 「山」(cf. Kaz. taw)

jüñ(215v3) 「毛, 羊毛」(cf. Kaz. zün)

jirim(218v8) 「歌い手」(cf. Kaz. zir 「歌」)

šolay (259v17) 「はい, 然り」(cf. Kaz. solay, Tat. šulay いずれも「そのように」)

対応するチャガタイ語固有の形式は、それぞれ tağ(157r16), yün(347r11), yıraw(349r26), šundaq(259v18) として『サングラーフ』に用例とともにあげられている。

「ルーミー」の例

ämäk(50v5) 「苦勞, 努力」(cf. Tr. emek)

ödä-(66v13) 「支払う」(cf. Tr. öde-)

biñ(150r26) 「千」(cf. Tr. bin)

čäri(205v29) 「軍」(cf. Tr. çeri)

9) 『サングラーフ』には数種類の写本が知られている。E. J. W. ギブ記念信託蔵の写本のファクシミリ版が、詳細なインデックスとともに Sir G. Clauson により出版されている [Sang.]。本書で用いたデータはすべてこのファクシミリ版によっている。一方近年イランで出版された刊本 [Sang. T] をも参照することができた。この刊本は羽田亨一氏の御厚意により利用することができたものであり、同氏に深く感謝したい。ただしこの刊本は残念ながら誤りが目立つ。

10) 『サングラーフ』に収められた地名・人名・部族名のリストは Sang.: 109 を参照。

11) それぞれの語彙リストは Sang.: 89, 87-88 を参照。

dal-(224v3)「水に潜る」(cf. Tr. dal-)

対応するチャガタイ語固有の形式は、それぞれ emgäk(114v29), ötä-(61r10), miñ(321v6), čerig(218v6), tal-(158r11) として『サングラーフ』にあげられている。

特にかなりの数にのぼるルーミー語彙の位置付けは重要な問題である。いくつかの項目には用例として詩人 Fužūli の作品などからの引用が添えられているが、これらはもちろんチャガタイ語ではなく、オグズ語群を基盤とする西方のチュルク語文章語のひとつで書かれている。従ってルーミー語彙とされている項目がチャガタイ語の語彙として『サングラーフ』に収められたものではないことは明らかである。

ところで、「ルーミー」という注記を伴っていないくても、同様にオグズ語群のチュルク語に属する可能性のある項目が存在する。これらは2つのグループに分けて考えることができる。ひとつはルーミー語彙からの派生語であり、これらは Clauson によって前述のルーミー語彙のリストに加えられている。今ひとつは、それ以外の語でオグズ語群の言語特徴を示すものである。実際には古典チャガタイ語自体がオグズ語群のチュルク語に由来する要素を含んでいるため¹²⁾、オグズ語群の言語特徴を示すだけではそれがチャガタイ語の語彙ではないと主張するには不十分である。とは言え、『サングラーフ』の編者はしばしばそれらと対応する、チャガタイ語固有の言語特徴を備えた形式をも収録している。特に後者にのみ用例が付されている場合には、そちらがチャガタイ語としての語彙であり、対応するオグズ語群形式はチャガタイ語の語彙ではなかった可能性が高い。以下それらについて検討する。

言語的特徴からオグズ語群に由来する可能性が高いもの

(A) 綴り字の特徴から

oñurğa [ʷkwɾɣh] (80r1)/oñurğa [ʷnkwɾɣh] (89r12)「背骨」(cf. Tr. omurğa; Osm. 'k^rɣh etc.)

どちらにも用例はない。軟口蓋鼻音 /ŋ/ を文字 käf (*k*) あるいは文字 käf+上3点 (*k^*) で表記するのは、古アナトリア・トルコ語やオスマン語などの特徴である。同じ音はチャガタイ語では nün (*n*) + käf (*k*) で表記される。従って上記例のうち左側のものは、オスマン語などと同じタイプの表記法を用いる、オグズ語群のチュルク語から混入したものと判断される [cf. EDPT: 92r-93l]¹³⁾。

12) cf. 菅原 1991。

13) ただし『サングラーフ』の見出し語形は、ルーミー語彙中の /ŋ/ に対してもチャガタイ語式の -nk-による表記を用いるのが普通である。

(B) 音韻的特徴から

〈初頭の d-〉

チャガタイ語では、一部を除き固有語の初頭に d- は見られない¹⁴⁾。一方初頭の d- はオグズ語群のチュルク諸語の重要な特徴のひとつである¹⁵⁾。『サングラーフ』において初頭の t-/d- 両方の形式であげられている語には次のようなものがある（以下、用例があげられているものには下線を付す）。

- dapqu(223r18)/tapqu(151v1)「非難, 叱責」
dapqur(223r20)/tapqur(151v1)「分隊, 部隊」¹⁶⁾
 daš(223v26)/taš(157r3)「石」; 「外, 遠い」¹⁷⁾
dal(224v4)/tal(160r23)「柳」¹⁸⁾
 dalğa(224v16)/talğa(160v11)「波, 海や空の荒れ」
 dawulğa, dawluğa(224v27)/tawulğa, tawluğa(165v28)「兜」(<Mo.)
 düp-düz(225r3)/tüp-tüz(167v11)「まっすぐな, 真っ平らな」
duzağ, duzaq(225r10)/tuzag, tuzaq(175v19)「わな」
 dügün(225r26)/tügün(183r11)「結び」¹⁹⁾
 dola-(225r27)/tolğa-(184r8)「巻く」
dolaš-(225v8)/tolğaš-(184r23)「巻かれる」
 dolağ(225v10)/tolaq(184v5)「脛当て」
 dolašiq(225v11)/tolašiq(184v5)「巻かれた, 撚られた」
 dolī(225v20)/tolu(184v15)「霰」
 duman(225v20)/tuman(185r16)「霧」
 doņuz(226r1)/toņuz(187r13)「豚」²⁰⁾
 dek(226v5)/tek(198r16)「静かな, 黙った」²¹⁾
 dämür tikäni(224v21)/temür tikän(200v12) (植物の名)²²⁾

14) Eckmann 1966: 44-45 を参照。

15) ただしその分布は複雑であり、オグズ語群内でも食い違いが見られる。

16) tapqur には「租税引き上げの押し付け」(taħmil o taklif-e zāyed bar xarāj) の意味も示されている。

17) 「同伴・共同の意味」(ma'ni-e ma'iyat o mošārekat) を表わす -taš (157r6) /-daš (223v26) は接尾辞であり、ここでは除外される。

18) dal には「木一般」の意味も示されている。

19) dügün には他に「婚礼, 宴」の意味も示されている。cf. Tr. dügün 「結婚式」。同じ意味のチャガタイ語は、今日のウズベク語やウイグル語と同じく toy (188r10)/toy (261v10) である。

20) doņuz の意味は「豚」ではなく「間抜けで軽率な者」(šaxş-e xošk-mağz-e sar-be-havā) となっているが、比喩的な用法と考えられる。

21) tek の用例は tek tur-(197r21), tek turguz-(197v14) の項に見られる。

22) temür tikän には他に「鉄菱」の意味も示されている。

diklāš-(226r29)/tiklāš-(198r14)「鋭く見る；直立する」

dīnla-(226v28)/tīnla-(201r21)「聴く，言葉を熟考する」

dīnqī(227r3)/tīnqu(202r23)「停止，静止；[比喩] コーランの章句の区切り」

dewā tikāni(227r5)/tewā tikāni(203r2) (植物の名)

上に示した項目のうち，初頭に d- をもつ語では 4 例のみにチャガタイ語の用例があげられている。このうち dal の例は次の対句である。

qāmatīm **dal** u yašim gul-rang erūr tā nāz ilä/**dal** u gul tekkän nihāli üzrā ārām
āylādiḡ [=NŠ ガザル No. 360]

ここで最初の dal は「アラビア文字ダール (dāl)」，二番目の dal は 'dāl u gul' で「飾り，衣服の花模様」(cf. [NLug. I: 499]) を意味するものであり²³⁾，いずれも「柳」あるいは「木一般」の例ではない。duzaḡ の例 [=GS ガザル No. 296] は，エディション及び手元のファクシミリ²⁴⁾では тузәг/tuzaḡ とあり，duzaḡ は誤写の可能性はある²⁵⁾。一方 dolaš- は対応する tolḡaš- とは韻律上の価値を異にするため，これらはヴァリエーションとして存在し，両者の間には意図的な使い分けがあったものと考えられる。dapqur (および tapqur) に対しては，同義のルーミー形式が tabur [=ṭabur(261r9)] であること，さらにルーミーでは dapqur/tapqur が「鞍の中央に通す革ひも」の意味をもつことが記されていることから，tapqur/dapqur「分隊，部隊」はともにチャガタイ語形式と見なされることになる。

これらを除く初頭に d- をもつ形式は用例を伴っていない。対応する初頭に t- をもつ形式がしばしば用例とともに示されていることと比較するならば、『サングラーフ』の編者はこれら初頭に d- をもつ形式をチャガタイ語テキストから採ったのではないという疑いがもたれる。

結局これらの形式は，

- ・チャガタイ語の音韻体系に合わない
- ・同じ意味でチャガタイ語の音韻体系に合う形式（初頭に t- をもつ形式）が存在する
- ・実例によって確認されない

という 3 つの理由により，チャガタイ語の語彙として収められたものではなく，オグズ語群の言語から混入したものである可能性が高いと言える。

23) 全体では次のように訳されよう：「我が背はダール（のように曲がり），涙は薔薇の色 / 花模様に彩られた若木のもとでおまえが憩うてからというもの」。なおこの対句の解釈については E. Umarov 氏の御教示を得ることができた。ここに記して感謝したい。

24) Kulliyāt-i Navā'i. Paris, Bibliothèque Nationale, MS. Suppl. turc 317, 34b. 京都大学文学部西南アジア史学研究所蔵のコピーによる。

25) Sang. におけるチャガタイ語の引用例には，üçün を ičün と表記するような一種の 'oghuzism' が見られる。

〈初頭の b- (m-に対して)〉

buz(134r8A)/muz(319v10)「氷」(cf. Tr. buz; Uz. muz)

beñzä-(150r10)/meñzä-(321r24)「似る」(cf. Tr. benze-)

beñzät-(150r24)/meñzät-(321r25)「なぞらえる」(cf. Tr. benzet-)

beñzäs-(150r24)/meñzäs-(321r27)「互いに似る」(cf. Tr. benzeş-)

beñiz(150r27)/meñiz(321v8)「頬, 顔 (色)」(cf. Tr. beniz)

これらと並行する biñ(150r26)/miñ(321v6)「干」(cf. Tr. bin; Uz. miñ) では, 前者に「ルーミー」の表示がある。その一方で bänzä-(128r21)「似る」, bänzät-(127r18)「なぞらえる」, bäniz(127r29)「頬, 顔 (色)」という項目も見られる。このうち後2者は「ルーミー」とされ, 対応する「チャガタイ語」形式はそれぞれ beñzät-, beñiz であると記されている。このように初頭の b-/m- に関しては状況が複雑でありさらに詳しい検討が必要である。

〈子音の後の *-g の消失〉

bula-(139v15)/bulğa-(140r27)「汚す, 混ぜる」(cf. Tr. (archaic) bula-; Uz. bulğa-)

tawšan qurti(165v20)「センチコガネ」//tawušqan(165v21)「うさぎ」

(cf. Tr. tavšan; Uz. (dial.) tovuşqân, Uyg. toşqan いずれも「うさぎ」<OT tavušgan)

bula-/bulğa-「汚す, 混ぜる」については, 上で見た dolaş-/tolğaş- 同様, 韻律による使い分けがあった可能性もある。tawšan qurti はオグズ形式 tawšan を含む複合語である。これと並行する例 sičan otı (250r25)「薬草の一種」//siçgan(250r27)「ねずみ」(cf. Tr. sıçan; Uz. siçqân いずれも「ねずみ」)では前者は「ルーミー」とされており, tawšan qurti も同様にチャガタイ語の語彙とは見なしがたい。このようなオグズ語群形式と見られる動植物名があげられていることは, 『サングラーフ』の編者がオグズ語群の言語を身近に知っていたことの証拠となるものである²⁶⁾。

(C) その他の語彙的特徴から

uñuz(65v14)/oñgay(89r2)「安い」(cf. Tr. ucuz; Uz. oñgay「容易な」)

öksürük(79v23)/yötäl(341v9)「咳」(cf. Tr. öksürük; Uz. yotal)

omuz(86v25)/egin(109v)「肩」(cf. Tr. omuz; Uz. egin)

öylä(92v19)/tüş(178r)「正午」(cf. Tr. öğle, Az. öylä; Uz. tuş)

26) cf. tomuzgan(185r28)「甲虫」//toñuz(187r13)「豚」(cf. Tr. domuz; Uyg. toñuz いずれも「豚」)。ここでも tomuz はオグズ語群に由来する要素と思われる。

islat-(102v28)/ibit-(93r5)「濡らす」(cf. Tr. islat-; Uz. ivit-)

isti ot(104v17)/burj, burč(132v14)「胡椒」(cf. Az. istiot; Uz. murč)

bul-(138r12)/tap-(150v8)「見つける」(cf. Tr. bul-; Uz. tâp-)

bulun-(139v7)/tapil-(151r9)「見つけられる」(cf. Tr. bulun-; Uz. tâpil-)²⁷⁾

buluš-(139v12)/tapiš-(151r12)「互いを見つける」(cf. Tr. buluš-; Uz. tâpiš-)

スラッシュの左側に掲げた、オグズ語群の特徴を示す形式にはいずれも用例があげられていない。「胡椒」は『バーブル・ナーマ』にウズベク語と同じ murč の例がある [BN: 585. 11, 582. 19]。一方『サングラーフ』はさらにルーミー形式として bübär(128r13)「胡椒」をあげており、これはトルコ語 biber に対応する。アゼルバイジャン語 istiot は isti「熱い」+ ot「草」の構成によっており、上記 isti ot (isti ot とも読める) もこれと同じ構成と考えられる。一方「熱い」のチャガタイ語形式は isig, isiq であって isti ではない。従って isti ot が今日のアゼルバイジャン語につながる言語から『サングラーフ』に取り入れられたことは確実である。にもかかわらずそのことの注記は見られない。即ち、編者は明らかにオグズ語群に属するこの言語を「ルーミー」とは見なしていなかったうえに、その語彙をチャガタイ語語彙と特に区別することなく『サングラーフ』に収めたことになる。

編者の意図がどうであったにせよ、『サングラーフ』に含まれる情報は、さまざまなレベルでオグズ語群、おそらくはイラン方面で話されていたチュルク語の影響を強く受けていると言える。このことは『サングラーフ』のチャガタイ語辞書としての性格を曖昧にしている。明らかに『サングラーフ』に収められた語彙はチャガタイ語の範囲を超えており、見出し語項目として立てられていることが直ちにチャガタイ語の語彙であることを保証するものではないことに注意しなければならない。

III モンゴル系語彙の位置付け

チャガタイ語におけるモンゴル系言語の要素の存在はすでによく知られており、モンゴル時代以降のチュルク語－モンゴル語関係を考える上での重要な問題点と見なされている²⁸⁾。『サングラーフ』の見出し語がかなりの数のモンゴル系言語に由来する項目を含んでいることは Clauson によって示された [Sang.: 16-18] (語彙リストは Sang.: 91-99)。また Doerfer も TMEN I において『サングラーフ』中のモンゴル要素にしばしば言及している。

『サングラーフ』のモンゴル系語彙には, barangar(121v14)「右翼」, tawulga, tawluga

27) bulun- には「いる、存在する」の意味も示されている。

28) この問題を扱った近年の研究として Sertkaya 1992, Nagy 1997, Шербақ 1997 (特に pp. 199-212) をあげることができる。

(165v28)「兜」, daruğa(223v22)「ダルガ」, sagadaq(232r29)「えびら」のように軍事や行政などに関わる用語としてチャガタイ語語彙の重要な部分をなしていたことが明らかなものがある一方で、逆に基礎語彙に属すると見なされるものも少なからず存在する。

ödür(66v19)「日」, usun(75r25)「水」, ula(85v19)「高い山」, tosun(176r24)「油」, dabusun(223r22)「塩」 *etc.*

この種のモンゴル系言語に由来する語彙（いずれも用例を伴わない）が『サングラーフ』の编者によって知られていたという事実は、それ自体確かに重要ではあるものの、前節で指摘したように『サングラーフ』に収録された語彙が全体としてはチャガタイ語の範囲を超えるものであったと考えられる以上、これらの語についても、チャガタイ語において借用語として定着していたものと直ちに結論付けることはできない²⁹⁾。

興味深いことに、いくつかの語は同形の固有名詞と対になる形であげられている。

öljeytü「祝福された、幸いな」/Öljeytü (人名) (86r10)

batu「堅い、堅固な」/Batu (人名) (119v18)

tolı「鏡」/Tolı (人名) (184v24)

joči「突然」/Joči (人名) (212r14)

deb「位、幸運」/Deb Baquy (人名) (226r19)

sayın「良い、選ばれた」/Sayın (称号) (238r29)

これらの語（いずれも用例を伴わない）は、それぞれの固有名詞の意味を説明する目的であって『サングラーフ』に収録された可能性が高い。従って、実際の用例によって傍証されていない以上、これらをチャガタイ語の語彙の一部であったと見なすことはできないのである³⁰⁾。

IV 誤った、ないしは疑わしい語釈

本章では、冒頭で取り上げた almaštur- のように、『サングラーフ』に掲げられた語形や語義が誤っている、ないしは疑わしいものをいくつか取り上げる。

učsarraq(65r27)「より高い地位」(semat-e bälätar)

『バーブル・ナーマ』³¹⁾ から次の例があげられている。

har kimniñ ki i'tibārī köpräk tur **učsarraq** turarlar [=BN: 149. 13]

29) 『サングラーフ』に見られるモンゴル系語彙に関する疑義は、Doerfer [TMEN I: 141, *etc.*] や Clauson [EDPT: 228 l örgesün の項] によっても指摘されている。

30) abaga (~abaqa)「父方のおじ」/Abaga (人名) (27v8) も同じような対であるが、abaga はチャガタイ語文献中に用例が存在する [BN: 31-6, 34-13, 40-8, 103-16/19; ML: 176]。

31) 『サングラーフ』では *Ta'rix-i Bāburi* という名称であげられている。

『サングラフ』の語釈によるならば、この文は「尊敬を多く得ている者がより高い地位に立つ」という意味を表わすことになるが、これはトートロジーである。učsarraq は uč「端」+ sarı「方」+ -raq (comparative) という構成によっており、『パーブル・ナーマ』日本語訳 [間野 1998: 158] にあるように「より端の方 (に)」と解すべきものである。後に続く文脈に učqa čiq-「端に出る」という表現が見られることからそれは明らかである。接尾辞 -rāk/-raq の前で狭母音が脱落する並行例は ilgärrāk(113r1) < ilgäri + -rāk ; ičgärrāk(96v19) < ičgäri + -rāk を参照。

uy-(89r18)「傷を巻く, ヨーグルトが固まる」(zaxm bastan, mäst bastan)³²⁾

この動詞は同じ綴りの動詞 oy-「掘る」, uy-「承諾する, 従う」とまとめて一つの項目として扱われている。「傷を巻く」の用例としては『パーブル・ナーマ』からの2例があげられている。

Šahsuwärniñ bašidın kaf-i dastča pärča sünäkni qiliči alıp ketär bašini **uydılar** yaxşı boldı

Şamadniñ bašini **uyar** kişi yoq edi oşol zaxm bilä bardı

いずれも若干の脱文があるが、BN: 97.17-18, BN: 97.18-19 にそれぞれ対応する。これらの日本語訳は次のようになっている(太字は引用者)。

「シャフスワールの頭から手のひら程の大きさの骨をそぎ取った。(中略) 人々はシャフスワールの頭を開頭した。彼はよくなった。」[間野 1998: 113]

「サマドの頭を開頭術をほどこす者がいなかった。(中略) 彼はその傷のために死んだ。」[同: 113]

訳文から明らかなように、問題の動詞は uy-ではなく oy-「掘る」と読むべきものである。即ち、uy-「傷を巻く」は用例から推定された語釈であり、実際には存在しないものである。一方 uy-「ヨーグルトが固まる」の例はあげられていないが、アブルガーズィー・バハードゥル・ハーンの『トルクメン諸族の系譜』(1659/60) に次の例が見られる。

ayturlar süt **uydi** süt erkänindä biri birindin ayrılur erdi qatıq bolgandın soñ biri birigä yapışa turur.

『「ミルクが固まった』と言う。(つまり) ミルクの状態では互いにばらばらであったが、ヨーグルトになった後は互にくっついている。」[ŠT: 129]

従って「固まる」は正しい訳語であると判断される。cf. Uyg. qetiğ uyu-「ヨーグルトが固まる」。

32) Clauson [EDPT: 42 r] は最初の語義を 'to form a scab, to coagulate' としている。「ヨーグルトが固まる」と並べてあげられていることを考えるならば、確かに編者はこの意味を意図したのかも知れないが、ここでの用例とは明らかに合わない。

iki tewälik yolum(109r19) 「二頭のらくだの道; 夜明けの地平線のたとえ」 (räh-e do oştore; kenāye az ofoq ke maṭla‘e şobḥ-e şādeq o kāzeb ast)

『ライラーとマジヌーン』から次の用例があげられている。

čün mihr saḥar yolın yaruttı/iki tewälik yolumnı tuttı [=LM 1979³³]

これは、「太陽が夜明けの道を照らすと / 2人のらくだに乗った者が私の道を遮った」と訳することができる。iki tewälik (あるいは iki tewälig) が「2人のらくだに乗った者」を意味するのであって、見出し語のような iki tewälik yolum という語句は存在しない。なお tewä 「らくだ」、tewälik (tewälig) 「らくだに乗った者」という項目はいずれも『サングラーフ』にはない。

töbän(167v8)「ひっくり返った, さかさまの, 頭を下にした」(negun va vāzgun va sarāzir) yüzi **töbän** tüşübän markabiñ izigä falak/yer üzrā qurşnı qılğan kebi gadāy talāš [=NŞ ガザル No. 242]

「汝の乗物の跡に天は³⁴顔を伏せて / 地面にパンを物乞いが求めるように。」

この語に対応する Uz. tuban, Uyg. töwän はともに「下, 低い」を意味する。ここでの用例も yüzi töbän で「顔を下に」という意味で用いられたものである。『サングラーフ』では yüzi töbän(343r14) および baş túbän(124r8) も項目として立てられており, そこでは正しく「頭を下に, 顔を下げて」(sarāzir va be ru dar-oftāde), 「頭を下に, さかさまに」(sarāzir va sar-negun) の訳語が与えられている³⁵。

töz(175v7) 「耳たぶ」 (bon-e guş)

saqalın qırqıp iki qulağ **tözigä** zulflar āşufta-ḥāl qoyğaylar

「鬚を剃り, 両耳の下に巻き髪を乱れさせるだろう」 [=MQ: 54]

Clauson も指摘しているように ([EDPT: 571 r]), この語は OT töz ‘root, basis, origin’ に由来し同じく「土台, 下部」を意味する。用例は qulağ tözi で「耳の下」を表わしたものであり, töz 「耳たぶ」はこの用例からの誤った推定によるものである。

toñ-/toñul- (185v21) 「凍る; [比喩] 冷たくなる, 落胆する」(yax bastan; [majāzan] sard o del-sard šodan)

33) エディションでは ékki téve lik yolumnı tuttı のように読まれているが, 韻律に合わず誤りである。

34) エディションでは falak 「天」ではなく малак 「天使」となっている。ちなみに「汝」はここでは預言者ムハンマドを指し, 「乗物」とは人面身馬の天馬ブラークのことである。

35) OT töpün tüş- [DTS: 580 r], ホラズム・トルコ語 töpän tüş- [NF: 399. 8] はいずれも「頭を下げる, ひれふす」の意味をもつ。またホラズム・トルコ語 töpän as- [NF: 367. 11/ 12] は「逆さに吊るす」を意味する。『サングラーフ』の訳語はこれらの例には合いそうである。

2つの形式のうち *toŋ-*「凍る」(cf. [EDPT: 515 1]) は問題ないが、一方の *toŋul-* は *tüŋül-* と読むべきであろう。cf. *tüŋül-* ‘to be disappointed, disillusioned; to despair, give up hope (of something *Abl.*)’ [EDPT: 521 1]。『サングラフ』にあげられている用例がやはり奪格名詞とともに用いられていることからそれは明らかである。

‘*aĵab ‘aĵab maraž kašratidīn ħayātdīn tüŋülüp*

「驚くべき病の多さゆえに人生に〔奪格〕絶望し」 [=MQ: 149]

toŋul- は幽霊語であり、見出し語の綴り *twŋkwl̄m’q* 及び語義「冷たくなる、落胆する」は *toŋ-*「凍る」からの類推による誤りと考えられる。

čärgä(205v25)/*čergä*(218r24)「天幕, テント」(*šādorvān o xeyme o xargāh*)

salīp tur čār-bāliš gul tutup tur čärgä bulbul

ne sūd ol šah ičäy dep mul mušarraf äylämäs awrang

「薔薇は玉座を設え、夜鶯は天幕を保つ

(しかし) 何の甲斐があろう、かの王は酒を飲むべく王座を訪れはしない。」

エディション [NŠ ガザル No. 335] には *čoprax* とある。ペルシア語 *čärgah* は旋法の一つを意味し、上記例は「夜鶯はチャールガフ旋法を奏でる」と解釈される。綴り字が *č’rkh* であること、用例における韻律が長短長であることから、*čärgä* (*čä:/r/gä:*) よりも *čärgah* (*čä/r/gah*) という読みの方が適切であると言える³⁶⁾。一方これのヴァリエントとされる *čergä* には2つの用例が見られる。

yüz kiši rašk etküčä čergäm qanı/miŋ kiši atlanguča ölkäm qanı

‘*Umar Šayx Mirzāniŋ özgä begläri wa yigitlärigä farāxwar-ħälları wilāyat u yer u moča u čergä u wajh-i istiqāmat muqarrar boldi*

後者は『パーブル・ナーマ』からの引用であり、エディションの対応箇所およびその日本語訳は次の通りである。

‘*Umar Šayx Mirzāniŋ özgä begläri wa yigitlärigä har qaysıga farāxwur-ħälları wilāyat u yer u moča u čärgä u wajh-i istiqāmat muqarrar u mu’ayyan boldi.*

[BN 26.15–17]

「ウマル・シャイフ・ミールザー配下の他のペグたちや若党にも、それぞれ適当に、領地や職務、俸禄を定めた。」[間野 1998: 41–42]

問題の語はここでは *črk’* と綴られているが、BN では他に *čyrk’*, *fyrk’* の綴りでも見られ、いずれも「身分」「位」「階級」などの意味で用いられている³⁷⁾。これらは『サングラフ』

36) cf. [NLug. III: 477] (чоргахの項)。

37) BN: 77. 9, 95. 8, 326. 6, 569. 2 他を参照。

に「列， 隊列」の意味で用例と共にあげられている *ǰergä*(218r19)³⁸⁾ と同じ語であり， そのヴァリエーションと考えるとよい。意味的にも上の引用文では，「領地や地所， 職務， 俸禄」とともに定められたものとして「天幕」よりも「階位， 序列」がより適切であるのは明らかである。

もう一つの用例は『篤信家たちの驚嘆』からの次の対句である。

yüz kiši rašk etküčä **čergäm** qanı/minj kiši atlanguča ölkäm qanı

「100 人が羨むほどの我が天幕はいずこ

1,000 人が馬を駆るほどの我が牧地はいずこ。」 [=HA LII-58]

エディションでは *črk'* と綴られている。確かにここでは「天幕」という解釈も可能だが， 「隊列」ないし「階位」として何ら問題はなく， この一例を根拠に「天幕」という意味があったと主張することはできない。結局， *čärgä/čergä* 「天幕， テント」という語は存在せず， その例としてあげられているものはいずれも *ǰergä* 「列， 隊列； 階位， 序列」のヴァリエーションであると判断される。

šük(259v10) 「正直な， 真実を言う」 (*räst-gu va räst-goftār*)

šükkinä(259v11) 「(同指小形)」 (*räst-goftārak*)

har ne dediñ bar edi baštın ayağ yalğangına³⁹⁾

äy Nawā'i munča yalğan degüčä bol **šükkinä** [=FK ガザル No. 553]

「何を言おうと頭からしまいまで嘘ばかりであった

ナヴァーイーよこのような嘘を言うくらいなら正直であれ。」

『サングラフ』における訳語は用例から推定されたものと思われる。*šük* は OT *šük* (< Sogd. cf. [EDPT 867 r]) に由来する語であり， 「黙って， 静かに」を意味する。この語はウイグル語 *šük* として現存している。*šükkinä* は *šük* の指小形であり， 用例は「ナヴァーイーよこのような嘘を言うくらいなら黙るがよかろう」のように訳せる。

Clauson は『サングラフ』のインデックスにおいて， いくつかの誤りや疑わしい項目を指摘している。またその後 EDPT においても新しい指摘や訂正を加えている。本章で取り上げた語例のうちでは *učsarraq* が 'dubious' とされ [Sang.: 38]， また *čärgä/čergä* は 'Probably a corruption of the synonymous Persian word *xargāh*' と判断されていた

38) この語はモンゴル系の言語に由来する。cf. [TMEN I: 291-293]; モンゴル語 *ǰerge/зэpэр* 'sort, kind, category; class, rank, ...' [Lessing 1960: 1045 r]; キルギス語 *ǰerge* 「列， 隊列」を参照。

39) エディション及び手元のファクシミリ (注24参照, 291a) では一部語順が異なり， *ёлгон-фина боштин аёк/yalğangına baštın ayağ* となっている。韻律上はどちらも可能である。

[Sang.: 57] が、これらの指摘はいずれも正確ではなかったことになる。一方で Clauson によって 'dubious' とされていても、用例を通じてその実在が確認できるものもある。言うまでもなく Clauson が研究を行った当時にとっては利用可能なチャガタイ語のテキスト・エディションは極めて限られており、『サングラーフ』における引用例の検証は不可能であった。近年チャガタイ語のテキスト・エディションの刊行が進みつつあり、『サングラーフ』に代表されるチャガタイ語古辞書類の研究においてもこれら新しいエディションを活用することにより有益な成果が期待される。

V 結 語

18 世紀に編纂された『サングラーフ』は独特の性格を備えている。チャガタイ語の語彙のみを収録した辞書と単純に考えることはできず、『サングラーフ』に見出し語としてあげられていることのみを根拠にその語がチャガタイ語の語彙であったとは言えない。言い換えれば、『サングラーフ』は厳密な意味でチャガタイ語の典拠とはなりえない。Muḥammad Mahdī Xān は Maḥmūd al-Kāšġari ではなかったのである。この辞書を正しく評価し有効に役立てるためには、個々の引用例の典拠を確定し検証する作業を経ることが不可欠である。

[追記] 本稿は第3回松崎ワークショップ（2001年4月）における発表「チャガタイ・トルコ語－ペルシア語辞書サングラーフの研究から」の内容の一部にその後の研究成果を加えたものである。

言語名略号

- Ar. = アラビア語
- Az. = アゼルバイジャン語
- Kaz. = カザフ語
- Osm. = オスマン語（翻字）
- OT = 古代チュルク語
- Sogd. = ソグド語
- Tat. = タタール語
- Tr. = トルコ語
- Uyg. = （現代）ウイグル語
- Uz. = ウズベク語

参考文献

- BN: ザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブル『バーブル・ナーマ』
間野英二校訂. 京都 1995.
- BW: Алишер Навоий, Хазойин ул-маоний. Бадоеъ ул-васат (Мукаммал Асарлар
Тўплами 5). нашрга тайёрловчи: Ҳамид Сулаймон. Тошкент 1990.
- DTS: Древнетюркский Словарь. Ленинград 1969.
- EDPT: Sir G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. London
1972.
- FK: Алишер Навоий, Хазойин ул-маоний. Фавойид ул-кибар (Мукаммал Асарлар
Тўплами 6). нашрга тайёрловчи: Ҳамид Сулаймон. Тошкент 1990.
- GS: Алишер Навоий, Хазойин ул-маоний. Ғаройиб ус-сиғар (Мукаммал Асарлар
Тўплами 3). нашрга тайёрловчи: Ҳамид Сулаймон. нашрга Тошкент 1988.
- HA: Алишер Навоий, Хамса. Хайрат-ул-аброҳ (илмий танқидий матн). тузувчи: Порсо
Шамсиев. Тошкент 1970.
- LM: Alī-şīr Nevāyī, *Leyli vü Mecnūn*. hazırlayan: Ülkü Çelik. Ankara 1996.
- MQ: Алишер Навои, Возлюбленный Сердец. Сводный текст подготовил А. Н. Кононов.
Москва-Ленинград 1948.
- ML: 'Alī şīr Nevāyī, *Muḥākemetü'l-luğateyn*. hazırlayan: F. Sema Barutçu Özönder. Ankara
1996.
- NF: *Nehcü'l-Ferādis. Uşmaḥlarning Açıq Yolu* (Cennetlerin Açık Yolu) II. Metin. çevriyazı:
János Eckmann, уауынlayanlar: Semih Tezcan-Hamza Zülfikar. Ankara.
- NLug.: Алишер Навоий Асарлари Тилининг Изоҳли Луғати I-IV. Тошкент 1983-1985.
- NŞ: Алишер Навоий Хазойин ул-маоний. Наводир уш-шабоб (Мукаммал Асарлар
Тўплами 4). нашрга тайёрловчи: Ҳамид Сулаймон. Тошкент 1989.
- Sang.: *Sanglax. A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*. Facsimile
Text with an introduction and indices by Sir Gerard Clauson, London 1960.
- Sang.T: Mirzā Mahdī Astarābādi, *Sanglāx. Farhang-e torki be-fārsi az sade-ye davāzdahom-e
hejri*. virāstār: Rowšan Xiyāvi. Tehran 1374.
- ŞT: Ebulgazi Bahadır Han, *Şecere-i Terākime*. hazırlayan: Zuhul Kargı Ölmez. Ankara 1996.
- TMEN I: G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen I: Mongolische
Elemente im Neupersischen*. Wiesbaden 1963.
- Eckmann, J. (1966) *Chagatay Manual (Uralic and Altaic Series 60)*. Bloomington/The Hague.
- Lessing, F. D. (1960) *Mongolian-English Dictionary*. 3rd re-printing 1995. Bloomington.
- 間野英二 (1998) 『バーブル・ナーマの研究Ⅲ 訳注』. 京都.
- Nagy, É. K. (1997) Mongolian loanwords in Chagatay. In Berta, A. (ed.) *Historical and Linguistic
Interaction between Inner-Asia and Europe, Proceedings of the 39th Permanent International
Altaic Conference (PIAC)*. Szeged. 139-145.

Sertkaya, O. F. (1992) Mongolian words and forms in Chagatay Turkish (Eastern Turki) and Turkey Turkish (Western Turkish). *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1987, 265 – 280.

菅原 睦 (1991) 「チャガタイ・トルコ語の発展における非カルルク型形式」『アジア・アフリカ言語文化研究』41, 91 – 100.

Щербак, А. М. (1997) Ранние тюркско-монгольские языковые связи (VIII–XIV вв.). Санкт-Петербург.

(東京外国語大学外国語学部)